

「さわる」と「ふれる」

作家で美学者の伊藤亜紗氏は、著書『手の倫理』の中で興味深い考察をしていました。それは、傷口に「さわる」と傷口に「ふれる」という二つの言葉の違いについてです。

伊藤氏によれば、傷口に「さわる」と言われると、痛くて反射的に防御したくなるけれど、傷口に「ふれる」となると、相手への配慮や気遣いが含まれていて、ふれられる人も「痛いかもしれないけれど、ちょっと我慢してみようかな」という気になる…」というのです。

私もなるほど！と共感しました。「ふれる」という言葉には、どこか内側に向かう信頼や、双方に共振するいたわりの予感が呼び起こされ、力が蓄えられるイメージがあるのです。

私も他の例で考えてみましたが、たとえば相手の気に「さわる」といえば、相手を嫌な気持ちにさせたり、相手の感情を害したりするといった意味があります。

一方、相手の気持ちに「ふれる」というと、相手にそっと寄り添ったり、相手に共感したり、相手の感情を優しく包み込んだりする…といった意味になるのです。日本人の美德といわれる「相手のことを察する文化」も、この「ふれる」感情に近いのではないかと思います。

コロナ禍以来、日本社会で急激に失われてきているのは、この「ふれる」という営みではないでしょうか。当時医療従事者やエッセンシャルワーカーの方々に向けられた心ない言動、偏見や差別に満ちた眼差し、これらは相手の心に土足で踏み込むような行為であり、相手の傷口を直接「さわる」行為そのものだと思います。

こうした大人社会のあり様は、当然のことながら子どもたちの世界にも負の影響を与えます。SNSでは攻撃的な言葉の数々が、子どもの心を容赦なく「さわり」続けるのです。さらにSNSの文化は、言葉の饒舌さや即効性に価値が置かれ、本来言葉がもつ豊かさや情感からは離れ続けています。詩人の長田弘氏も、『言葉の豊かさとは、美辞麗句ではなく、限られた言葉にどれだけ自分を豊かに込められるかどうかである』と言っています。

実は、言葉の余韻や沈黙の中にこそ真実が隠れているのであり、私たちは「ふれる」という感覚を取り戻す必要があるのではないのでしょうか？毎日子どもに接する親や教師の言動や態度が、子どもの心に日々「ふれる」ことにより、彼らの安心感や自己肯定感につながっていくことをしっかり心に刻みたいと思います。